歴史探訪

「うつくしま」への系譜

開園から200年 名君・松平定信と南湖公園の先駆的精神

白河市の南湖公園は、「寛政の改革」を推進し、近世の代表的名君といわれた松平定信が享和元年（1801）に造営し、四民（士農工商）共楽のために開放した「日本最初の公園」です。そして開園からちょうど200年を経た今も、南湖は市民の暮らしの中でごく自然に親しまれています。ここでは、白河市歴史民俗資料館学芸員の佐川庄司さんにお話を伺いながら、定信の善政や庭園思想をたどり、現代にも通じる南湖の先駆的精神を探ってみました。

■傑出した名君ならではの南湖造営

西の那須連峰と東南の関山を借景とし、四季折々に趣深い表情を見せる南湖公園。この公園は、白河藩主で幕府老中首座を務めた松平定信の政治的手腕と文化的素養がいかんなく発揮され、それらが見事に結実して造営されたものでした。

松平定信

宝暦八年（1758）生まれ。「天明の大飢きん」のさなか、天明三年（1783）に若き白河藩主となった定信は、藩の困窮を救い、「白河では餓死者を一人も出さなかった」と言われるほどの成果を挙げた。この実績を評価され、天明七年（1787）幕府の老中首座に就任、「寛政の改革」を断行して中央政治をリードした。寛政五年（1793）、老中を辞し、再び白河藩政に専念。数多くの地域事業を推進するとともに、学問・芸術の道を究め、当代きっての文化人としての名を高めてゆく。文政十二年（1829）、72歳で没。

借景とする那須連峰が、鏡のように湖面に映る南湖公園。定信が庶民とともに風月を楽しむことを理想としたその美しさは今も、多くの人々を引きつけてやみません

松平定信画像　これは定信自ら画筆をとった自画像を下絵として、狩野派の絵師が仕上げたもので、現在は福島県立博物館に収蔵されています（写真提供：福島県立博物館）

西の那須連峰と東南の関山を借景とし、四季折々に趣深い表情を見せる南湖公園。この公園は、白河藩主で幕府老中首座を務めた松平定信の政治的手腕と文化的素養がいかんなく発揮され、それらが見事に結実して造営されたものでした。

松平定信

宝暦八年（1758）生まれ。「天明の大飢きん」のさなか、天明三年（1783）に若き白河藩主となった定信は、藩の困窮を救い、「白河では餓死者を一人も出さなかった」と言われるほどの成果を挙げた。この実績を評価され、天明七年（1787）幕府の老中首座に就任、「寛政の改革」を断行して中央政治をリードした。寛政五年（1793）、老中を辞し、再び白河藩政に専念。数多くの地域事業を推進するとともに、学問・芸術の道を究め、当代きっての文化人としての名を高めてゆく。文政十二年（1829）、72歳で没。

「寛政の改革」の後、白河藩政に専念するようになった定信が、地域の殖産興業策の一つとして取り組んだのが、南湖の開拓でした。当時の南湖は、〝大沼〟と呼ばれる貯水沼でしたが、いつのころからか堤が壊れ水が抜け、雑草の茂る荒れた沼になっていました。それを定信は、貧困者救済も兼ねて改修工事を行い、沼の水を灌漑に用いた新田を次々に開いたのです。当時は幕藩体制が大きく揺らぎ、相次ぐ年貢増徴と商品経済の展開で没落した農民が年々増加し、社会不安も広がっていました。24歳の時に著した代表的政治論「国本論」の中で「民は国の本である」と説き、「農は国の本」を信条とする定信が最も力を入れたのは、「天明の大飢きん」以来、疲弊した農村を再建し、より生産力が豊かな農村をつくり上げることだったのです。新田開発自体は、当時、全国の諸藩でも行われていた政策の一つでした。「並の大名ならばここで止まるところですが、そこに近代的な『庭園思想』を加えて整備したところに、定信の卓越した政治思想が窺われます」と、佐川さんは話します。

定信が、南湖の最も眺望のよい場所に建てた茶室「共楽亭」。その室内には、身分の隔てなく共に楽しむため、鴨居や敷居がありません。すぐ隣に、定信の歌碑が建てられています

南湖真景図（複製品）　上下の絵で南湖を周遊したように描かれていて、当時のたたずまいが今もそのまま残されていることが見てとれます

「南湖は白河城（小峰城）の南方にあることや、中国の詩人・李白の詩句「南湖秋水夜無煙」にちなんで命名されました」と語る佐川さん（左）。南湖開墾の碑（右）には、定信の「造営の理念」が刻まれています

■先駆的な発想が生んだ自然公園

儒学や音楽・和歌・書・絵画などにも秀で、当代きっての文化人でもあった定信は、風雅を愛し、作庭にも造けいが深く、生涯に5つもの名園を作りました。そのうち唯一現存するのが南湖ですが、この公園は、定信の先駆的な庭園観を最も主張したものといえます。このことについて佐川さんは、「もちろん、それまでにも諸藩に大名庭園というものはありました。しかしそれらは、城内または別邸（下屋敷など）に築かれたもの、つまりあくまで藩主とその家臣のためのものにすぎませんでした。それに対し、南湖は身分の隔てなく、藩主とともに領民も共に楽しむという『四民共楽』の思想を基本として造園され、開放されたところに、先駆的な意義を持っています」と検証します。南湖の完成は、近世には概念のなかった「パブリックガーデン・公園」の誕生でした。

定信は、湖面北側の鏡山に茶室「共楽亭」を建てて庶民にも開放しました。定信自身が「共楽亭」を詠題として詠んだ和歌に、「山水の　高き低きも隔てなく共に楽しき円居すらしも」があります。佐川さんはこの和歌について「これには、身分の高い低いに関係なく、共に集まって楽しもうではないかという意が込められており、南湖の造営に対する定信自身の思想が最もよく表された和歌といえますね」と話します。

また、湖畔を歩いてみると、南湖が作為的な形式美にとらわれない自然公園であることに気付きます。「これは『作るべき庭は地勢に従い、できるだけ自然に近い形をまねる、あるいは残すべきである』という定信の庭園観が存分に生かされたからですね」と分析する佐川さん。定信は、江戸時代を代表する茶人でもありましたが、茶の湯の神髄とはまさに自然体。さまざまな文化的素養によって培われた、定信の「真善美を見極める」眼が、ありのままの自然に本当の価値を見い出し、それが南湖という形に結実したのかもしれません。そして、このような見識があればこそ、数々の善政を遺すことができたのでしょう。ともあれ定信は、「世にとって本当に大切なものは何か」を知る、卓越した近世の政治家であり文化人であったといえるでしょう。

■南湖の精神を未来へ

文化元年（1804）に建立され、定信の家臣であった儒学者・広瀬蒙斎が記した「南湖開墾の碑」には、南湖造営の経緯が書かれていますが、それはこのような言葉で結ばれています。「ここに遊びに来る人は絶えず、美しい眺めを見て喜んだ。数十年を経たらどんなだろう。その時、人々は定信公のおかげであることを知るだろうか。遊びには来てもその根源を知らないであろう。今後遊びに来る人は、このことを考えてください」（原文は漢文）――。しかしこれは、地元の人々にとっては杞憂にすぎませんでした。ここ白河では、定信の遺徳が市民精神として受け継がれ、南湖を愛する心が確かに息づいています。それは、造営当初から市民のものとして親しまれてきた歴史を踏まえれば、ごく自然なことのように思えてなりません。そして今年、南湖開園200年を記念し、白河では大茶会、「定信と庭園―南湖と大名庭園―」企画展など、さまざまな行事の開催を通して、あらためて定信の遺徳をしのび、未来へと語り継ごうとしています。

現代では、全国各地で「美しい景観づくり」への取り組みが盛んに行われています。その理想はまさに「自然のものを自然のままに」――。つまりこれは、定信が遙か昔に造営した南湖の先駆的精神に、200年を経た今、ようやく人々が気付き始めたともいえるでしょう。わたしたちがこれから目指すべき理想の風景、それは「平成の南湖づくり」なのかもしれません。